

# レオン・ブロワにおける 貧しさの意義について (2)

水 波 純 子

は し が き	
第一章 反ブルジョワ	以上第11巻第4号
第二章 「貧しき者」の歴史	本稿
第三章 貧しさの秘義	
第四章 金銭の象徴	
あ と が き	

## 第二章 「貧しき者」の歴史

第一章でわれわれは、レオン・ブロワにおけるブルジョワ批判の意味を検討したが、本稿で、かれが、自ら生きた社会から人間の歴史にその展望をひろげ、独特な歴史観をかれの世界のもう一つの中心テーマとしていることをと知りたいと思う。

いったい歴史とは、人間の何かの発展の方則——生物学的、政治的、経済的、宗教的、その他の——あらわれであるのか？ それとも偶然、または恣意的な人間の自由の産物であるのか？ 進歩とは存在するのだろうか？ 核兵器をその恐怖の頂点とする科学の発達が、人類を破滅に導くのではないかと、現代人は恐れているのだが。

ブロワには、歴史上の人物や事件を主題にした作品 *le Révéléateur du Globe* (1884) 『地球の啓示者』, *Christophe Colomb devant les Taureaux* (1890)

『牡牛のまえのクリストファー・コロンブス』, *la Chevalière de la Mort* (1891) 『死の女騎士』, *le Fils de Louis XVI* (1900) 『ルイ16世の息子』, *Constantiople et Byzance* (1906) 『コンスタンチノーブルとビザンチウム』, *l'Ame de Napoléon* (1912) 『ナポレオンの魂』, *Jeanne d'Arc et l'Allemagne* (1915) 『ジャンヌ・ダルクとドイツ』などのいわゆる歴史物があるが、そのほか、*le Désespéré* (1887), 『絶望せる男』, *la Femme pauvre* (1898) 『貧しき女』の小説や、随想集、日記などで、しばしば歴史にかんする考察を行なっている。

この歴史にたいするかれの関心、歴史好みの発端は、幼い時に聞いた母方の祖父の物語であったと言われる。祖父の Jean-Nicolas Carreau (1784-1862) は、21才のときにナポレオン軍に入隊し、スペイン遠征に従軍、フランス国内を転戦した軍人で、退役後 Périgueux の町を選んで住み、結婚してこの町に住んだ子供たち（レオンの母はその三女）とその家族との交わりのなかで暮した。レオン・ブロワがナポレオンにたいして終生賛美の感情をもちつづけたこと、*l'Ame de Napoléon* という作品を書いたのは、この祖父の影響と言われ、ナポレオンを介して、かれはフランスの歴史に結ばれたと言えよう。

ブロワはパリに出て、Barbey d'Aurevilly を識り、文学修行を始める。師がすすめたのは、Joseph de Maistre, de Bonald, Blanc de Saint Bonnet らのカトリックの思想家の読書であった。かれらの影響のもとでブロワは改宗し、過激なカトリック的批評家となった。Barbey と親交のあった Blanc de Saint Bonnet は、かれに歴史を研究するようにはげました最初の人である。かれは手紙のなかで、「歴史は、あなたが受け取った特別な才能を展開し、明らかにする機会を提供するでしょう。」<sup>1)</sup> とのべている。

しかしかれが独特の神秘的歴史観をいだくにいたるには、Tardif de Moidrey という神父との出逢いをぬきにしては語れない。de Moidrey 神父は、1829年生れ。ノルマンの古い貴族の出身である。ブロワがかれを識ったのは1877年といわれ、娼婦 Anne-Marie との同棲生活がもたらす、罪の意識の内

的葛藤と物質的窮乏、宗教的に目覚めた Anne-Marie との神秘生活の共体験、かの女の発狂という、自らも狂気の淵を歩んだ、かれの人生のもっとも暗い時期であった。ブロワの才能をみとめ、敬意と愛情をもって接した de Moidrey 神父は、この時期のブロワの数少ない相談相手であった。神父は、1879年9月、聖母出現の聖地 la Salette にブロワとともに旅行中、発病して死んだ。わずか2年と期間は短かったが、神父の精神的影響は終生に及んでいる。

神父は1869年、クローデルの序文をえて、*Livre de Ruth, essai d'interprétation morale*『ルト記注解』を出版しているが、聖書についての特殊な解釈法をブロワに教えた。この解釈法とは、聖書のなかの聖パウロの言葉、「今私たちは、鏡を見るようにぼんやりと見ている」(コリント人への前の手紙13章12節)に忠実にもとづいて、この世のすべては、世の終りの再臨の日まで、なぞであり、まぼろしであり、真実を写す鏡に他ならないとし、聖書に示された神の言葉を象徴として、この世のすべてを解釈しようとするものであった。ブロワは自伝的小説『絶望せる男』のなかでこう言っている。

「たしかにマルシュノワール(＝ブロワのこと)は、かれから知的素養のもっともよい部分を受けついたのであった。故人はかれに、聖書解釈の難解な方法を伝授した。それはただちに、この濃縮する精神の燃える鏡のなかの、普遍的代数学となった。」<sup>2)</sup>

この象徴的解釈法といえるものが、以後のブロワの精神生活を決定づけているのである。かれは一そう聖書に親しみ、聖書のなかにすべてを——世界史をも——解く鍵を求めるようになる。Bossuet よりも De Maïstr よりも、また他の思想家よりも、de Moidrey 神父に手ほどきされた解釈法による聖書についての瞑想にもとづいて、歴史観をくみ立てようとするのである。

さきにあげた『絶望せる男』は、かれの代表作の一つで、幼少時代から知的形成期のすべての出来ごとを下敷にして書いた自伝的小説である。このなかでブロワは、自分の作家的将来がどのようにして歴史のほうに向うようになったのか、また、その歴史観がどのようにして形成されていったかを、その生成の混頓と熱気のうちに、内側から描いている。そしてここには、かれの将来の歴

史観の基本的内容がすでに述べられている。それゆえ『絶望せる男』を中心に、かれの歴史観をさぐって見たいと思う。

この時期よりまえに、かれはコロンブスの伝記『地球の啓示者』を出版していた。——『絶望せる男』のなかでは、la vie de Radegonde（聖ラドゴンドの生涯）として描いている——そのなかでかれは、コロンブスを、新大陸にキリストの福音をもたらす使徒として描き、そのわざの失敗、その栄光と悲惨を描いたのであった。この本のためにかれは、「髪の間まで資料をあさった。」<sup>3)</sup>しかしそれに必ずしも忠実でなく、それが「自己の経験によって確實だと証明された一般的概念の公正さを破るときには、嫌悪をもって排斥し、」「不信にみちた高慢さで用いた。」<sup>3)</sup>

この作業を通じて、かれは歴史の実証的研究というものの空しさを痛感した。歴史研究がたんなる資料の集積に止り、そこから意味を導きだそうとしないことを非難してかれは『絶望せる男』のなかで言っている。

「考証学的博識は、アレクサンドリアの図書館に充ち、めがねをかけた無数のねずみたちの食料となった。このねずみたちの仕事は、大きな動物の記録の糞の巨大な堆積のなかの藁くずをつつきまわし、いささかの結論をひきだすことをも、自らに禁ずることだった。」<sup>4)</sup>

しかしカトリックであるブロワの、「自己の経験によって確實だと証明された一般的概念」とは、Bossuet (1627-1704) が *Discours sur l'Histoire universelle* 『世界史叙説』でおこなった、各時代、各帝国の変遷を、神の意志の明白な表れとする考えは異なるのである。

de Tardif 神父の弟子であるブロワは、「すべてをなぞとして見る」聖書の象徴主義から世界的象徴主義 Symbolisme universel<sup>5)</sup>、歴史の象徴主義 Symbolisme de l'Histoire<sup>6)</sup> とかれが言うものを導き出した。「すべての人間行為は、それがいかなる性質のものであれ、聖書の歴代史略と呼ばれうるであろうところの、神秘にみちに、はかりがたい一冊の書物の、無限の統辞論に協力している」<sup>7)</sup> とかれは言う。

歴史は、その意味は神の目からは明らかだが、人間の理性には接近不可能な、しかしわれわれにつねに解釈を迫る一冊の神秘の書である。

「世界史は、かれには、均質的で、固く結び合わされ、脊椎と骨格を具え、弁証法的につくられた、しかしまったく包みこまれた一つのテキストとして表れた。それを接近可能な文法に書きかえることが問題」<sup>8)</sup> となり、かれは、「象徴による啓示の神的象形文字としてみられた歴史的事件のシャンポリオンたることを夢み」<sup>9)</sup> るのである。

ところでブロワにとって、この世の事象はすべて神意の反映であり、偶然というものは存在しえない。「人が摂理にすべてを、絶対的に与えないなら」「カトリック信者ではありえない。」<sup>10)</sup> ——このばあいブロワにとってカトリックであるとは、人間であるということを意味しているのだ。——しかしまた、人間の歴史は、人間が自由に選びとったものではないだろうか？ ブロワにおける神の全能と人間の自由の関係という困難な問題について、『レオン・ブロワ論』の Albert Béguin<sup>11)</sup> に援けを求めよう。

Béguin は説明して言う。歴史は、人がそこに神の誤りなきわざを見るか、人間の自由の支離滅裂な発頭を見るかにしたがって異なる、二つの観点から考えられうる。この観点は、対立しているのではなくて、いわば重ね合わされているのだ。歴史は、神的光とともに、罪の測りえぬ夜を表わす。一方は他方を排除しない。なぜなら、神の計画は、はじめは自由意志に何の余地も残していないように見えるが、現実には、その必然的なつながりをなしている種々の要素のあいだにおける、人間の協力を予想しているのだ。事件の複雑な織り物は、数多のもつれた糸でできているが、その象徴の意味と価値により解釈されるべきもので、摂理の歴史を語っており、啓示のしるしなのである<sup>12)</sup>、と。

マルシュノワール (=ブロワ) はこの解き難い闇をまえにして立ち止る。

「すべての夜の手がこの混頓を織っていた。三つの情欲は、疲れを知らぬ紡ぎ女のように糸をくり出し、七つの罪がエピソードのときがたい渦をとおして、すべての世代のまわりに、四方八方から、腹ばいになって、この糸を巻きとっ

ていた。」<sup>13)</sup>

論理的言語では絶対に置換不可能なこの詩的表現が示そうとする曖昧性は、ブロワの精神を驚かせはしない。なぜなら——と Béguin は言う——ブロワはつねに、神秘の現存を現わすことに向う。ところがこの神秘は、一種の否定、あるいは測りがたい不可知性によって現される<sup>14)</sup> ことを彼は知っているからだ。

マルシュノワールは言う、「わたしはよくわからないが、神の現存と人間の自由は、何ら和解されることを欲しない。それは正確に、絶対的に、本質的に、実体的に、同一のものであるからだ。」<sup>15)</sup> のちにかれはこうも言っている。「永遠の昔からは神は知っている。神のみが知るある時において、ある者が、自由<sup>に</sup>に、必然的行為を行うことを。」<sup>16)</sup>

「人は説明できない。しかしそれがあることを肯定することができる。ちょうど夜が、知性を盲目ならしめ、魂の無名の能力にとってまばゆい光を、生み出すように」と Béguin<sup>17)</sup> は言う。

ブロワは、人間の歴史を構成する、時代、地域、国家を否定する。歴史という神秘の書には、時間、空間は存在しない、とする。

「諸々の事件は、継起的ではなく、絶対的なしかたで同時代的である。同時代的であり、同時的である……諸々の事件は、われわれの目の下に、無限の布のようにくり展げられる。われわれの目の働きが、継続的なのだ。」<sup>18)</sup> ——なぜなら、神にとっては、時間も空間も、数も歴史も存在しない。それらは、神の分有であるところの、人間の側のものでしかない。「支払能力を有する永遠の主には、時間は要らない。時間は、人間の嘆きと悲しみでもってつくられている。」<sup>19)</sup>

それだけでない。時間は、悪魔がつくったものである。「時間は、人類の敵の欺瞞である。」<sup>20)</sup>

こうした考えは、現代の歴史観をまったく否定するものである。かれはすべてを、永遠の光のなかに置く。

「われわれはいつも15世紀にいる。また10世紀に、カルワリオのあがないの

時にいる。われわれは、古い歴史の多彩な前掛けのひだのなかにいる。絶対のなかでは、われわれは世界の歴史の同時代人である。』<sup>20)</sup>

「時間は神にとっては存在しないので、マルヌの説明しえぬ勝利は、2世紀まえに生れた少女の、いとつつましい祈りによって決定されたことが、ありえるのだ。』<sup>21)</sup>

Béguin は指摘して言う。ブロワによる時間、空間の否定は、もし、かれの瞑想の中心テーマであった諸聖人の通功 Communion des Saints の神秘を認めないなら、まったく理解不可能であろう、と。

Communion des Saints とは、地上、天国、煉獄の魂たちが、時間、空間をこえて感応し合い、その徳と罪、喜びと苦しみを相互に転換することができるという秘義である。この神秘的な相互の連関性は、苦しめるキリストとの Communion にもとづくものである。キリストは、二千年まえに十字架にかかって死んだが、しかし、いまでも、世の終りまで、魂たちの相互の連鎖の中心となり、そのあがないのわざの完成のために、十字架上で苦しみ続けている、という。この諸聖人の通功のドグマが歴史の形而上学、時の転換性の神秘に導くのである。

この時空を超えた神秘的歴史の中心にあるものは、そのみが唯一の事実である、あがないのわざを行なう十字架上の苦しむキリストである。

「キリストの王冠のいばらは、数十世紀かん、恐怖にみちに世界の脇腹に、肉をひき裂く苦行帯のとげのように、ささっている。』<sup>22)</sup>

一切の慰さめを奪われて血の汗を流すキリストは、ブロワによりとくに「貧しき者」le Pauvre と呼ばれる。「我は貧しき者」<sup>23)</sup>と聖書に書かれているからである。ブロワにおいて、苦悩と貧しさは、ここでも他の多くのばあいでもほとんど同義的に解釈することができるであろう。

「すべての地上のことは、苦悩のために命じられている。ところでこの苦悩は、かれの目には、目的であるとともに、始めであった。それはただ単に、あとからつけ加わった威嚇的な意図であるのではなく、そのなかに神意が読まれるべき神秘の書の論理じたいであった。』<sup>24)</sup>

こうして、プロワによる歴史とは、十字架上の「貧しき者」を中心に、時間も空間もなく、世の終りまでつづくあがないの歴史である。ブルジョワの対極にある貧しい者が、キリスト＝「貧しき者」との Communion において、人間的存在性を与えられ、歴史のなかに重要な位置を占めるのである。

それゆえ、『絶望せる男』のなかの苦悩するマルシュノワール＝プロワこそ、歴史の神秘を解釈する資格を具えた人物であるといえよう。しかしこの書のなかでプロワは、このわざと方向が、その困難ゆえに自分の文学的将来を破滅に導くであろうと予感している。実際詩的イメージにみちたすばらしい歴史にかんする文章も、残念なことに、この小説全体の堅固な理論的根幹となることなく、すべては、世の不正にたいする激しい怒り、嫌悪の叫び、苦悩と絶望の渦のなかに巻きこまれてしまっている。そしてこの本は、象徴的にも、主人公マルシュノワールの絶望の死によって閉じられるのである。

こうしたかれの神秘的歴史観は、基本的には、それ以後の作品においても変わることはなかった。しかし『絶望せる男』の、華やかな比喩にみちた宣言文的な調子は、かれの生きた苦しみの時間のなかで、だんだん瞑想の静けさと深さを帯びてゆく。

「歴史は夢のようだ。それは、しばしば苦しみにみち、つねにとらえがたい幻影、固定することができないがたしかに幻影であるところの、時のうえに立てられているから。われわれが持続と呼ぶものの全体を構成している小さな断片の各々は、恐ろしい速さで過去の深淵のなかに飛びこんでいる。歴史は、亀の瞳孔に書き込まれた、ひしめき合う閃光以外のものではない。」<sup>25)</sup>

神の側からは永遠、人間のがわでは苦しみに他ならぬ時間は、闇と光の旋風としてわれわれのまえにある。

「歴史は、あらゆる空間同様に無限に広い深淵に似たもので、そこでは闇の旋風がたえず光の旋風と交代し、驚く観客の目をくらませる。」<sup>26)</sup>

歴史家というより、幻視家 *visonnaire*、詩人のものというべきこうした神秘にたいする直覚力をもって、かれは、かれの選んだ時代や英雄たちの物語を書



いたのであった。

かれは自らを中世の同時代人だと称していた。「わたしは末期ローマ帝国最後の人びとの同時代人で」<sup>27)</sup> それ以後のことには無縁だ、とかれは言っている。神を失って逸楽を求めつつ地上をころがった18世紀、黄金神の崇拜におぼれ腐敗墮落したかれの生きた19世紀のかたわらにあって、中世は、かれがもっともいつくしんだ時代である。

血なまぐさい戦争、大災害、悲慘のなかにあってつつましく十字架のもとにとどまった「巨大な教会……千年の法悦のうえに建立された祈りの場」<sup>28)</sup> としての中世のイメージは、「中世の暗黒」という常套語をまったく転倒させるものである。

「中世にとって、主の御受難はまったく同時代のものであり、目のまえで行なわれたものであり、キリストの血はまだいと暖かく、鮮かで、その耳はひどい喧噪にうなっていた。」<sup>29)</sup>

「この優しい民衆は、主の貧<sup>・</sup>し<sup>・</sup>さを驚くほどよく感じとっていた。貧しい者たちは、自分じしんの悲慘のうえに、荷いうる神の重荷を進んで荷って、いとも憐れむべき神にたいする同情のゆえに死ぬこともあったほどである。」<sup>29)</sup>

ジャンヌ・ダルクは、永遠の光に輝く中世が生んだもっとも偉大な聖女として描かれる。神の声にしたがい、戦ってフランスを救った乙女。——ブロワはフランスに、キリスト教界の長女たる特権をつねに与えている——「ジャンヌ・ダルクは、人間と悪魔に打ち克った女（＝マリア）の容易に感じられる予示であり、……聖霊にみち、……火に似ていた。」<sup>30)</sup> かの女は教会に従い、教会に裏切られて、火刑台上の死によって、キリストに似たものとなった。

コロンブスもジャンヌ同様に、その栄光と悲慘のうちで示される。主の使徒として福音伝導に燃えたつかれの事業は挫折し、人々に裏切られ苦悩のうちに死ぬ。かれとともに中世も死ぬ。そしてその意に反して、近代のいまわしい植民主義が始められるのである。

これが地上におけるすべての神秘的事業の運命である。——希望はこの世で

は、苦しみと引きかえにしか、けっして与えられない。しかし希望をもたらさぬ苦しみはない、と Béguin は言う<sup>31)</sup>。

ブロワはナポレオンについての本を書いた。1902年かれは日記に記している。「ナポレオンの物語はわたしを酔わせる。それによってわれわれの怖ろしい状態（貧乏）が、がまんできるようになる」<sup>32)</sup>と。20年の準備ののちに、かれが『ナポレオンの魂』を書き終えたのは、1912年5月であった。その愛着のゆえに、かれはナポレオン像を明確にするのにひじょうな困難を感じた。かれの野心的な計画のなかに、人の目には隠された、神の意図の偉大さを読みとろうとしている。しかしかれはナポレオンのうえに、あまりにも自分じしんの考えを移し植えたようだ。ナポレオンは、福音の使徒、聖霊の再臨の似姿として世界に君臨したがゆえに、貧しい者として孤独の死をとげるのである。

ブロワは十字架を歴史の中心に据え、キリストとの Communion により、貧しい者、苦しむ者にのみその真の存在性を与え、相互に共感できるものとした。『ジャンヌ・ダルクとドイツ』のなかでかれはこう言っている。

「人は、人みなこの極度の悲慘のなかで平等であることを感じる。ヒロイズムと美の幻惑は消え失せた。シャルマーニュ、ナポレオン、ジャンヌ・ダルク、だれが問題であるばあいでも、人はかれのうちに、追放の共同相続人たちの無限の群のなかの隣人、いとつつましい兄弟の姿のみを見るのである。栄光の歌、熱狂の叫び、民衆の歓呼の声はもうない。それは消え去った夢の中にしか、存在しなかった。もはや、苦行の、同情の、愛の、絶望の涙、未知の深淵に注ぐ、光にみちたまたは暗い河しかない。」<sup>33)</sup>

ブロワの伝記的作品のなかでもっとも重要なこの本は、ジャンヌが身を焼かれるときに握っていた木の十字架の賛美で終っている。

「貧しい者、流浪する者の十字架、田舎の古い道の優しい十字架、貧しい者たち、重荷を負うもの、足から血を流すもの、心に涙を流すもの、砂漠の蛇にかまれたもの、十字架をみつめて傷をいやされるものを、暖かく迎える十字架、悲慘と光栄の十字架に栄あれ。」<sup>34)</sup>

この世の事象は、神意を写す朧げな鏡であり、その象徴の意味を解釈することが歴史家の使命である。この世のむこうの真の世界とは、ブロワにあって、時間も空間も、進歩も発展の法則もない、貧しい苦しむ者の魂の連鎖の頂点で、キリスト＝「貧しい者」が十字架上で世の終まで君臨し続ける世界である。

未 完

### 注

- 1) *Chahier Léon Bloy*, Janvier à Avril, La Rochelle, 1932, p. 73.
- 2) Léon Bloy; *Le Désespéré*, Oeuvres, t. III, Mercure de France, 1964, pp. 60-61.
- 3) *ibid.*, p. 129.
- 4) *ibid.*, p. 135.
- 5) *ibid.*, p. 131.
- 6) *ibid.*, p. 132.
- 7) *ibid.*, pp. 131-132.
- 8) *ibid.*, p. 132.
- 9) *ibid.*, p. 131.
- 10) *ibid.*, p. 136.
- 11) Albert Béguin; *Léon Bloy, Mystique de la Douleur*, Labergerie, 1948.
- 12) *ibid.*, p. 49.
- 13) Bloy; *op. cit.*, p. 134.
- 14) Béguin; *op. cit.*, p. 50.
- 15) *ibid.*, p. 51.
- 16) Bloy; *l'Ame de Hapoléon*, Oeuvres, t. V. pp. 273-274.
- 17) Béguin, *op. cit.*, p. 51.
- 18) Bloy; *le Mendiant: ngrat*, Journal de L. B. t. 1, Mercure de France, 1956, p. 115.
- 19) *le Désespéré*, p. 59.
- 20) Bloy; *Jeanne d'Arc et l'Allemagne*, Oeuvres, t. X, 1969, p. 178.
- 21) Bloy; *Méditations d'un Solitaire en 1916*, Oeuvres, t. IX, 1969, p. 240.
- 22) *le Désespéré*, p. 149.
- 23) 詩篇 25章16節。
- 24) *le Désespéré*, p. 149.
- 25) *Jeanne d'Arc et l'Allemagne*, p. 207.
- 26) *ibid.*, p. 163.
- 27) Bloy; *la Femme pauvre*, Oeuvres, t. VII, 1972, p. 130.
- 28) *ibid.*, p. 118.
- 29) Bloy; *le Salut par les Juifs*, Oeuvres, t. IX, 1969, p. 44.
- 30) *Jeanne d'Arc et l'Allemagne*, p. 163.
- 31) Béguin; *ob. cit.*, pp. 87-8.
- 32) Bloy; *Quatre ans de captivité à Cochon-sur-Marne*, Journal, t. II, p. 115.
- 33) *Jeanne d'Arc et l'Allemagne*, p. 208.
- 34) *ibid.*, p. 224.